

世界で初めてケイ素の有用性を発見 小野寺 伊勢之助



小野寺伊勢之助（1888-1953）は岩手県西磐井郡中里村（現一関市中里）の生まれです。先祖は秋田の葛西家の武士小野寺左馬丞で、中里（前堀村）前堀城の城主であり、隣接する長泉院の建立者としても知られる地域の名家です。長男の伊勢之助は学問に志したため、家督を次男の伊右衛門に譲りました。

伊勢之助は明治38（1905）年に岩手県立一関中学を卒業した後、明治40年に盛岡高等農林学校（現岩手大学農学部）に入学し、同43年3月に卒業しました。同年5月に同学校の研究生（農芸化学専攻）となり、大正2（1913）年3月に同研究科を修了しました。

在学中の伊勢之助はたいへん学業が優秀で、2年生と3年生の時には特待生になりました。大原孫三郎は何らかの機縁で卒業前の小野寺伊勢之助に接触し、その才能を認めて勧誘したようです。研究生時代に、小野寺は大原から個人的援助を受けていました。さらに大原は小野寺の海外留学も援助しました。優秀な人材を育てるために援助を惜しまない大原孫三郎の見識の深さに感動します。

小野寺伊勢之助は大正3（1914）年に、最初はドイツのケーニヒスベルク大学に留学していました。しかし、第1次世界大戦が勃発したため、急遽ロンドンに避難し、ケンブリッジ農科大学で研究を続けました。僅か10か月で留学を終え、大原農業研究所に就職しました。研究所には1915－1920年の5年間しか在籍していませんでしたが、植物栄養、肥料学に関して多くの優れた業績を残しました。特筆すべきことは、世界で初めて植物に対するケイ素の有用性

を発見したことです。ケイ素は地殻中に最も豊富に存在する元素です。しかし、あまりにも普遍的な存在のため、植物の生育に対するケイ素の重要性は当時認識されませんでした。しかし、小野寺はイネのいもち病に抵抗性のある品種の葉には感受性の品種よりケイ素の含量が高いことを見つけ、大正6年（1917）に「農学会報」に「稲熱病の化学的研究（第1報）」として発表しました。これはおそらくケイ素の有用性に関する世界で最初の科学論文です。これをきっかけに、その後日本ではケイ素の研究が盛んになり、世界をリードしてきました。そのほかに、小野寺はレンゲソウや酸性土壌、ミミズの研究、化学分析法の開発などにも優れた業績をあげました。昭和15年に勲六等瑞宝賞、昭和18年に正五位の叙勲を受けました。

大正9年から13年まで丸見屋商店に就職し、台湾のミツワ嘉義農場及び朝鮮のミツワ浦項農場で農業技師として勤務しました。そして、大正14年（1925）に母校の盛岡高農に戻り、退職まで教授として研究・教育に従事しました。

宮澤賢治は小野寺伊勢之助の後輩にあたり、盛岡高農に戻った小野寺から土壌や肥料についていろいろと教わりました。

小野寺は教育にもひじょうに熱心で、昭和17年ごろ、脳腫瘍を患い失明してしまいましたが、それでも講義を続け、黒板に向かっては手でその広さを確認して文字を書きました。また学生には自分の著書を朗読させ、小さな誤りも決して聞き逃すことはありませんでした。

小野寺は多くの著書を残しました。農業学科校



用の土壌・肥料学の教科書4冊、肥料学の学術
専門書5冊を執筆しました。そのうち昭和26年
に出版された「改著肥料学新編」（養賢堂）は
ご自身の執筆ではなく、高農時代の12人の教え
子達による10年前に出版された「肥料学綱要」
からの改定です。これはその時期、小野寺はす

でに失明しており、教え子たちが恩師に報いる
ために改定しました。

昭和20年に退職したあと、郷里の一関市に戻
り、昭和28年9月21日に66歳の生涯を閉じまし
た。